

第一章 都市の成立

一 新文化の成立

インド文化を形成した主要民族はアーリヤ人である。彼らは西紀前一〇〇〇年以前に西北インドの土地に侵入してのち、次第に東方に向かって進出した。そうしてほぼ西紀前五〇〇年頃にいたるあいだに、ガンジス河上流のクル・パンチャラーの国土を中心とする諸地域において、インド的な特徴を具えた氏族制農村社会を確立し、司祭者バラモン(Brahmana 婆羅門)を指導者と仰いで、ささやかな農耕・牧畜の生活を営んでいた。ところが、その後さらに東方に進出し、ガンジス河中流の諸地域に定住し、その勢力は下流にまでも及ぶにいたった。そうしてそれとともに社会的・文化的にめざましい変動が起こったのである。それは西暦紀元前六世紀以後にはっきり現われたと考えられる。

まず、アーリヤ民族は東方に進出して、未知の新しい土地に定住した結果、必然的に彼らと先住民族との混血が盛んに行なわれた。新たに侵入して来たアーリヤ人の男子が、先住民の婦女を娶ることが非常に多かったであろうことは、想像にかたたくない。多数の氏族が全体として移住して来た場合でも、いくたの世代を経過するうちには、本来の血の純潔を保持しがたくなったであろう。現代インドの民族分布状態の調査報告を見ても、純粹のアーリヤ人が居住しているのは、主として西北インドであり、ガンジス河流域の住民は、アーリヨ・ドラヴィダ族 (Aryo-Dravidan) という類型に収められている。すなわちアーリヤ人とドラヴィダ人との混血なのである。このような混血がいつ頃から始まったか、ということは、なお今後研究すべき問題であるが、相当古い時代にまで遡りうる社会現象であると考へなければならぬ。原始仏教聖典を見ると、学徳兼備のすぐれたバラモンを評するに当たっては、必ず『七世已来父母真正』⁽¹⁾と記している。すなわち『父かたについても母かたについても双方ともに由緒正しく、純潔な母胎に宿り、七世の祖先にいたるまで血統に関してはいまだかつて指彈されたことがなく、かつて非難されたことがない。』⁽²⁾これが真正なるバラモンの標幟の一つとされる以上、当時の多くのバラモンならびに一般民衆は、必ずしもアーリヤ人としての民族的な血の純潔を保持していなかったにちがいない。事実バラモンの血統に関してはいろいろ疑いがもたれていた。⁽³⁾さてこのような混血が盛んに行なわれたとすると、そこには当然別種の民族が成立する。植民地に新たな民族が形成されると、その民族はもはや必ずしもアーリヤ人の父祖以来の伝統的な風習・儀礼・信仰をそのまま遵守しようとはしなかった。古来の民族的伝承に対しては、むしろすこぶる自由な

恣意的な態度をとった。彼らがヴェーダ文化、すなわちバラモン教の文化をさほど重要視しなかったのは、当然である。彼らはアーリヤ人系の言語のうちでも崩れたもの、すなわち俗語 (Prakrit) を使っていた。

また必ずしも混血が行なわれなくても、当時の商業都市においては皮膚の色を異にする多くの異民族が共に住むこともあったらしい。商業都市ヴェーサーリーのリッチャヴィ族は当時最も富裕であり、最も進歩的であったが、人種的には種々雑多であったらしい。リッチャヴィ族のある人々は黒色、ある人々は黄色、ある人々は赤色、ある人々は白色であったと伝えられている。⁽⁴⁾やがては混血を成立させることになったであろう。そうしてこういう超人種的な基盤がやがて仏教やジャイナ教のような普遍的・論理的宗教を伝播させるものとなったのである。⁽⁵⁾

(1) たとえば『長阿含經』(大正藏、一卷、八二上、一一二下)など。

(2) *Skt.*, p. 115; *DN.*, vol. I, pp. 113, 115, 137; *AN.*, vol. I, p. 163; vol. III, p. 154; 223. なお *Diyāvat.*, p. 620; *Jataka.*, vol. I, p. 2 もほぼ同文である。七世代ということは、当時インドで問題とされていたのである。異なった種姓の女をめとった場合に、七世代のうちに、その家の男が高い種姓あるいは低種姓にうつちれることがあった。 *Gaut.*, IV, 18 ならびに *Haradatta* の注参照。

(3) *MN.*, 93, vol. II, p. 156.

(4) *MPS.*, vol. II, 15, p. 96. *ニコソ*『白色の人は白い衣をまとい、白いかざりを身につけ、赤色の人は赤い衣をまとい、赤いかざりを身につけている』などと述べられているが、リッチャヴィ族の人々の皮膚の色がいろいろであり、その装飾品や衣裳も色がまちまちであったということは、ヴェーサーリー市が商業都市であるため人種的には種々の系統の人々が混在していたことを示している。